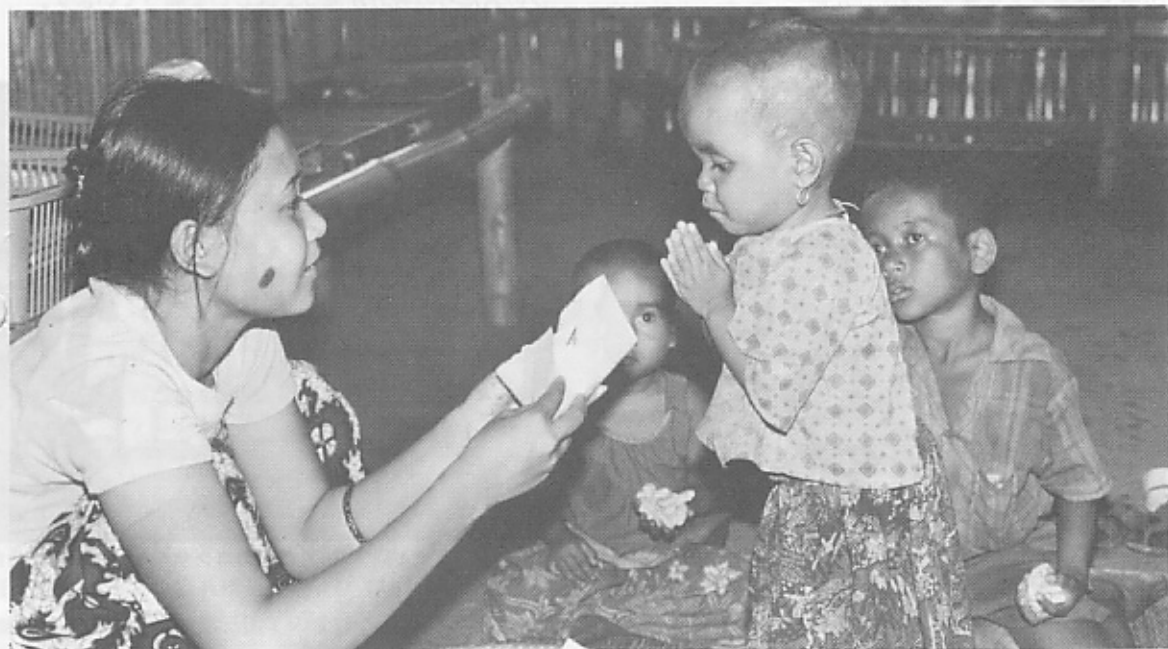




幼い難民に未来を

 NO.
11

●150東京都渋谷区広尾4-3-1 ●03-499-1226 ●振替口座/東京1-36227



△カオイダン・保育センター 小林正典撮影

ボランティアだより

いまでも難民キャンプにいます

秋沢 ヒロ

タイ・カンボジア国境に近いカオイダン・キャンプの滞在も、通算すると2年近くになりました。

私が初めてキャンプにきた1980年秋、CYRの保育センターで働く人たちは、第三国定住の夢を抱きつつも、眼の前の仕事に打ちこみ、働く喜びをかみしめているのがわかりました。しかし、4年近くたったいま、キャンプの人たちの仕事に対する気持や心構えも変化し、保育センターでの技術訓練や保育の仕事が「有利な職場」とうつつているように思えます。こうしたおとなの心の動きを子どもたちは見てとっています。

キャンプには、このところ毎日のように第三国へ定住

する人たちを運ぶバスが出入りしています。このバスを取り囲むようにして、大勢の人びとが親戚や知り合いを見送るために集まってきます。こんなとき、子どもたちも落着きなくおとなの様子をうかがっています。キャンプでの状況が不安定だからこそ、子どもたちへの援助はまだ必要なのだと、あらためて思います。

国境は最近の雨で橋がこわれたとかで、砲声も聞こえず静かです。この2、3日の低気圧で、私たちの宿舎があるアランヤプラテートの町は、かなりの浸水をみました。ボランティア団体の宿舎の多くが水びたしになり、家から道路まで、小舟を使って出てくるありさまです。

最初、私たちも家の中で釣ができるなどとのんびりしていましたが、水の汚れがめだつてくるとあれこれ心配が増えました。ようやく三日後には、宿舎の周辺も土がみえるようになりました。

ガオイダン・キャンプは敷地が傾斜しているのと、排水溝が完備しているのとで、道がぬかるむ程度ですんでいます。この点、難民キャンプの方が付近の村よりも衛生面では整ってるようです。

最近、日本政府が派遣した定住希望者の調査をする担当官がキャンプに見えました。CYRで働いていた人の間で、日本定住を希望した家族は、その資格がないと判定されたと聞きました。この人たちは、また別の国への定住願いを出して、第三国へ行くまでがんばるでしょう。

雨の中を元気に保育センターに通ってくる子どもたちのためにも、一日も早く心安まる生活がもどり、キャンプの人たちの努力が実ってほしいと願っています。



△第4回「160人の母のコンサート」戸畑市民会館

北九州「160人の母」のうたごえ響け

難民キャンプの子どもたちに幸せをと、昨年10月30日、北九州市戸畑市民会館で、160人のお母さんからなるコーラス・グループがチャリティ・コンサートを開きました。この催しは、4年前にさかのぼり、当時、難民となって苦しみと悲しみを体験した幼い子どもたちの救援を目的に、同市で毎年続けられてきました。

グループは、「女声コーラス“萩の会”」「高見女声コーラス」「北九州シング・アカデミー女声合唱団」「明治学園母の会コーラス」「コールあじさい」です。歌の好きなお母さんたちが、難民の問題を知らされたとき、自分の子どもを思う気持で不幸な子らを助けようと呼びかけ、コンサートを実現させました。国際情勢に無関心ではいけないと始めたこの催しを通して、お母さんたちはその後も難民の救援活動を支えてきました。

生まれたとき、骨と皮だった栄養失調の小さな子どもたちも、いまでは四歳の元気ないたずらっ子になってい

ます。将来どうなるかわからないまま何年も難民として暮らす人にとって、キャンプの保育所や仕事場はなくてはならない施設です。「幼い難民を考える会」が発足以来の念願としてきた、難民の自立を支えるための活動は、こうして発展してきました。

歌う練習に励み、その成果を幼い難民の明日に託したいと願う北九州のお母さんたちの気持と、難民キャンプにいて、難民の将来を思って仕事を続ける私たちの間には、なんの距離もありません。

この日、「幼い難民を考える会」を代表して、小倉雪枝成沢貴子の二人がコンサート会場で、キャンプの保育センターの庭に咲くつる花の種を、お母さんたちに手渡しました。この愛のキャンペーンはことしの秋で最終回を迎えます。しかし、5年もの間コンサートを支えてきた人びとの難民への関心は、これから本当に身近なところで、さまざまな形に展開してゆくことでしょう。

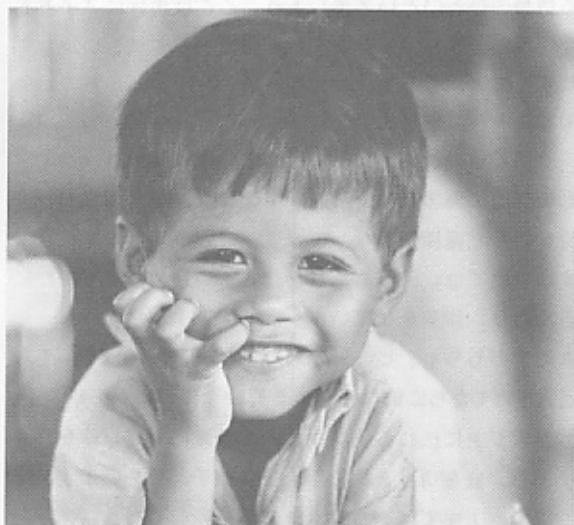
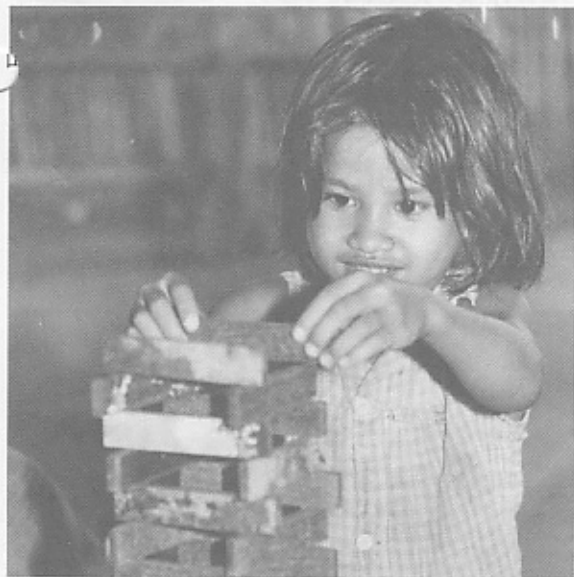
貧しい地域に生きる教育モデル

ミナ・スワミナタン

タイの国境沿いに設けられたカンボジア難民キャンプの訪問は、思いもかけず実り多い体験となりました。戦乱でめっちゃめっちゃになった国を逃げ出し、まだ死や熱病や飢えの記憶が生々しいときに、難民の教師が集まり、子どもたちの教育を始めたのです。それはアジアではあまり例を見ない教育の実験ともいえるものでした。

タイのカンボジア難民

カオイダン収容所は、1978年このかた、戦火のカンボジアを逃れてタイへ流れこんできた難民を保護するキャンプのひとつです。何十万という数の難民が、これらのキャンプに収容され、また出て行きました。難民のほとんどはごくふうの人たちで、職業はさまざまですが、政治にはかかわりのない人びとでした。その多くは兵隊で、軍籍もまちまちな徴集兵もいました。飢えに悩まされ、憔悴しきった人たちは、わずかな所持品を手に、受け入れの用意がなにもない隣の国タイへ流れこんできたのです。救援団体や国連機関は協力して救援の仕事を分担し合い、食糧、医療、定住などの問題に取り組みました。手に職があったり、技術を身につけていたり、外国に親類のいる人たちは、第三国での受け入れがきまり、キャンプを出て行きました。カンボジアに帰った人もいますが、大半の難民は、いままキャンプ生活を続けています。問題の糸口はまだ見つかっていません。キャンプ運営にあたる国連、タイ政府、救援団体の仕事はこれからも続けられねばなりません。



現在のカオイダンは4万の人が住む、整然とした居住地です。その周囲には有刺鉄線が張りめぐらされており、灌木が茂る野に忽然とできた町のような感じです。人びとの住いは竹とヤシの葉でできており、ここには病院、学校、診療所、さまざまな福祉施設があります。外からきたものには、だれもが忙しそうに働くコミュニティといえそうですが、キャンプが開かれたばかりの頃、救援の仕事にあたる人たちは、さまざまな問題にぶつかりました。着のみ着のままの人が増える一方で、受け入れ体勢がまるできていなかったからです。しかしボランティアのなかに、難民がただ働く場を用意するだけでなく、キャンプで暮らす人に必要なプログラムを自ら考え、運営することの意義に気づいていた人がいたのです。ここで自立の原則が取りあげられたのは、人びとが精神的な打撃から立ち直り、人としての尊厳や価値感を取りもどして、人まかせの生活や絶望からはい上がる努力をすべきだという考え方からでした。まもなく、教育を受けたことのない子どもたちのために学校が必要だとの意見がまとまり、カンボジア語で教える学校が開かれることになりました。

保育者の養成

やがて小学校のほかに、幼い子どもたちの発育を助ける目的の新しいプログラムが生まれました。6歳以下の子どもの保育プログラムを始めたのは、CYR（若い難民を考へる会）という団体でした。キャンプ内の若い人たちが子どもと接することによって、幼い子どもの成長の問題に関心をもち、同時に保育の手ほどきを受けるといのが、プログラムのねらいでした。CYRが運営する保育センターでの光景は、このキャンプばかりか、アジアのとくに貧しい地域全体を考えても、ひときわ印象に残る情景のひとつといえましょう。ここはまさに「子どもを学ぶ島」です。しかも安い費用で、他の貧しい地域でもすぐに実践できそうな、ゆき届いた子どもたちの活動の場です。

竹づくりの保育センターには広い中庭があり、コの字形の部屋に囲まれています。中庭には、独創的な遊具——竹を組んだ縄梯子、ベンチブランコ、平均台が見られます。室内では、子どもたちが数人ずつかたまって静かに遊んだり、作業をしています。そばで手作りの教材——人形、おもちゃ、ビーズ、カード、パズル、積木、本などを子どもたちに使わせている若い先生の姿があります。カンボジアに伝わる物語や歌も、日課になり、絵を描く子ども、紙を切り、粘土細工をする子どももいます。

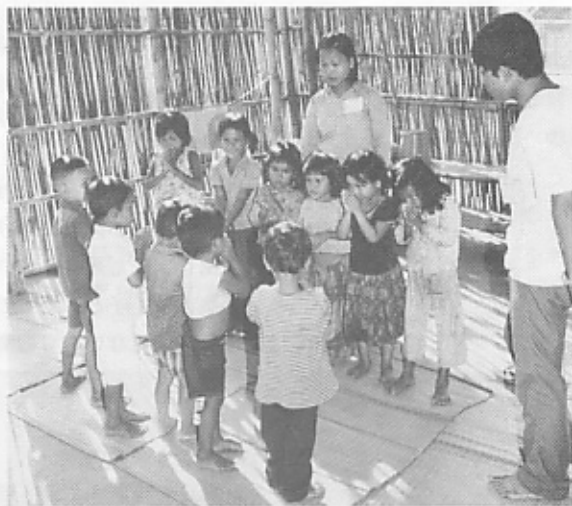
隣の木工室では、カンボジア独特のおもちゃ、楽器、道具づくりがすすめられています。絵が得意な先生は絵本や紙芝居もつくりました。カンボジア舞踊の手ほどきもあります。ごく限られた素材を使って、子どもの発育の要求に細やかに応じている、みごとな教育がここで実践されています。そして驚くほかないのは（専門家の指導のもとに）常識的には、養成をあるいは教育を受けた



とはいえ若い先生たちが、この保育センターを運営しているという事実です。

わざわざに読み書きできる「先生たち」

保育センターでは必要に応じて保育者を養成します。生徒の三人にひとりには若い女性です。しかもほとんどが



やっとな4年の教育を受けただけです。つまり、保育者の大半が、ほんの少し読み書きできる程度なのです。これが若い男性の場合は、小学校、なかには中、高等教育を受け、以前に小学校で教えた経験のある人もいます。女性の中には母親もいます。この人たちは、段階を追って4-6週間の養成を受けた「保母」です。養成はまず、遊ぶ子どもの観察に始まり、グループ別の子どもの世話をする先輩を見習うのです。やがて自分たちも子どもに接し、教材を作り、話し合いに加わり、話を聞き、ノートをとります。保育の手びきも印刷されましたが、これはどちらかという養成プログラムの参考資料です。4週間の短い期間では、保育の基本に触れ、発育のありさまに気づかせるのがやっとなで、教え方のテクニックなど、身につけるまでに時間のかかる問題には深入りするわけにはいきません。とはいえこの養成コースで学んだ人々には、正規の養成機関で学ぶケースにありがちな、誤ってつめこまれた知識を、また学び直す必要はありません。現場での実践をふまえて、経験のある人が新しい人を教えるシステムそのものは、カンボジアの人々にはなじみのある方法です。手ほどきを受けた人々を、教育学の分野では「パラ・プロフェッショナル（専門職助手）」と呼んでいます。

保育センターのこの養成システムはもちろん最初から



昨年2月にアフリカから帰ってきて、この先何をしようかと思っている時、ベトナム難民の定住施設、国際救援センター保育室で、保母の仕事があると聞き応募しました。開発途上国のどうにもやりきれない貧しさを見てきたあと、豊かな日本社会へそのまま復帰するには何らかの抵抗があった時、ベトナム難民に対する仕事への興味が大きかったことを覚えています。

外国にいと日本の国際的立場での評価が気になります。正直なところ、日本という国は、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカのいずれにおいても、まったく信頼されていないと思います。その原因は先の世界大戦の傷であったり、日本という国が単一民族という閉鎖的の性格であったり、経済大国として発展してきた商法の結果であろうと思われます。日本という小国は、諸外国と信頼関係を保ち、貿易を続けなければ生きていけない国です。日本社会で平和にいらしてれば、そういう心配はしな

いで生きていられますが、外から日本を見ると世界の中で孤立したさびしい国だという気がしてなりません。インドシナ難民に対しては自分達が勝手に国を出てきたのだから自分たちで何とかすべきだとか、この狭い日本にこれ以上の人口が増えて日本人でさえ生活が苦しいのに何で難民の世話までしなければならないのかとか、外国人が多く入ることにより、日本古来の文化・伝統が薄れていくのがいやだとか言い分はあると思います。この言

い分もわからないではありません。しかし、もう少し大きな目でみると、人間は世界中どこでもみんな同じ人間だというふうに思えてくると思います。人間は皆兄弟ということばがありますが、本当にそういう気がしてきます。地方から出てきて、東京でしばらく暮らしたあと、私はアフリカのマラウイへ行きました。その病院を訪れる母親たちの人なつこさは、東京の人からは、まったく想像できないものでした。いま接しているベトナムの母親たちも少しうれしいことがあると手を握り、腕をつ

かんで肌と肌を接触させて感激を伝えてきます。こうした素直な感情表現は文明人にはないすばらしさだといつも感心しています。人間は誰もが自分が生きることに精いっぱいですが、自分の場所を少しゆずって、他の人が生きることができれば、共に生きることができません。日本にはその余裕がまだあると思います。日本の物が豊富すぎる社会は、世界的にも異常なことだだと思います。いまの

自分の場所を少しゆずって



半藤晴子

物質に埋もれた生活を、ほんの少しゆずることによって難民が生きていく場所やお金が出てくるのではないかと思います。私にとって、救援センター内でのベトナム人の生活より、日本社会でのこの人たちの生活の方が心配です。保育室の子どもたちには子どもどうしの争いの世界はもちろんありますが、たいていの場合は平和です。ベトナム難民の子どもたちと暮らしてみても、この子らにせに成長してほしいものだと思わずにはいられません。

キャンプ・レポート

日本からの贈りもの

豊島庸子

昨年12月、日本で集められた約千トンの古着がタイにも届き、カオイダン・キャンプでも配られ始めた。数日後、保育センターの保母さんのひとりが500円札をもって、「これは本物？」と聞きにきた。もらった洋服のポケットに入っていたそうである（同じような話はその後何度か耳にした）。500円といえば、キャンプで働く人の5日分の給料に相当する。外部からの送金が許されていないキャンプでの現金だから、受け取った本人はニコリ。

でも、ちょっと待って。本当にこれでよいのだろうか。

「救援＝古着＝タンスの整理」という考え方は、どうも私には抵抗がある。国境で働くあるボランティアに「日本から届いた衣料がたくさんあるけど、配るのが大変だね。いるのならいくらでもあげるよ」といわれたことや、配給になったおとな用のワンピースを着た少女が、長いすそを引きずって土煙をたてながら歩いていたのを思い出す。

山のような衣類を、何万という難民の必要に応じて配るのは不可能に近い。できれば古着を「配る人」も送ってほしいというのが現場での本音だろう。衣類の山を見ていると、流行に合わなくて古着がたくさん出てくる日本の豊かさを、つくづく感じる。こうした古着と一緒に物を大切にしたい気持ちが失われているのだろう。古着を救援に生かすことに関しては、現地でも賛否両論がある。●丸がきっかけとなって、「救援」のあり方にもっと関心がよせられるとよいと思う。難民キャンプにきてから4カ月。ようやく自分の仕事が見えてきたところである。

催しもの



△カオイダン・保育センター 小林正典撮影

幼い難民を考える会の活動が今後も続くようにとの願いをこめて、この半年の間いろいろな催しものがあちこちで開かれました。

1983年7月21日

講演会 「難民キャンプの子どもたち」
全国社会福祉協議会全国保母会、保育の友主催、
東京・霞が関

9月26日－10月7日

写真パネル展 「育て難民キャンプの子ら」
幼い難民を考える会主催、東京・広尾

10月16日

バザー 「幼い難民のために」



△カオイダン・保育センター 小林正典撮影

幼い難民を考える会主催、東京・広尾

10月22日

写真パネル展／ミニ・バザー

聖心インターナショナル・スクール、ファミリーフェスティバル、東京・広尾

10月30日

コンサート 「160人の母のコンサート」主催、北九州・戸畑

バザー 藤森真紀子、寺谷陽子主催、東京・三鷹

11月3日

バザー うめだ「子供の家」主催、東京・梅島

11月16日

勉強会 世界の子どもと手をつなぐ会主催、千葉・習志野

11月26日

バザー 京都ゾントクラブ主催、京都

12月17日

バザー 京都ドイツ文化センター主催、京都

1984年1月8日

写真パネル展 築地教会主催、東京・築地

国外の事業

- 1 タイにあるカンボジア難民キャンプに開設されている保育センターの運営とその活動内容を、より充実させる。難民の自立と生活環境の向上を目的とした活動はつぎのとおり。

- 保育者養成
- 保育施設運営
- 技術研修と製作：織物 洋裁 木工
- 識字教育
- 図書室運営

- 2 タイにある他の難民キャンプで、他団体と協力し、公衆衛生、育児、保育知識の普及と指導にあたる。
- 3 タイ難民キャンプ以外の地域で、幼い難民を考える会が貢献し、活動できる体制をつくる。
- 4 キャンプ派遣ボランティアの数を3、4名に保ち、今後は、長期に滞在(最低1カ年)できるボランティアを中心に、活動を安定させる。

国内の事業

- 1 国際救援センターへの協力と保育内容の指導。
- 2 難民キャンプでの活動の意義とその成果を伝える。
- 3 活動資金を継続的に募る。
- 4 会員が参加できる企画をたて実施する。

昭和58年4月1日-12月31日収支報告

(単位 円)

科 目		国 内	国 外
収 入	会 費 収 入	2,713,547	—
	寄 付 金 収 入	5,995,746	85,000
	バザール他	2,531,844	339,348
	補 助 金 収 入	—	8,214,400
	難 民 収 入	151,650	1,458,189
	本 部 会 計 繰 入 金	—	1,107,000②
	前 年 度 繰 越 金	14,054,739	7,076,640
合 計		25,447,526	18,280,577
支 出	事 務 所 運 営 費	2,431,856	6,209,796
	事 業 費	6,601,556	—
	現 地 プロジェクト費	—	6,949,688
	現 地 会 計 繰 出 金	1,230,000①	—
	次 期 活 動 準 備 金	15,184,114	5,121,093
合 計		25,447,526	18,280,577

①と②の差額は円をパーセントに換算した際のレート差

CYR 20

- 1983・8・16 関口晴美、4度目の現地派遣でタイへ。
- 9・7 理事懇談会(事務局)
- 9・15 第13回理事会(事務局)
- 9・29 浜口勤、若林国昭氏(外務省難民問題対策室)ら定住調査団5名カオイダン・保育センター来訪。
- 10・1 いいぎりゆき、国連難民高等弁務官事務所定住担当官として、香港赴任。代表不在にともない山極小枝子理事が代表代行に就任。
- 10・19-25 小林正典氏(写真家)保育センター取材。
- 10・28 豊島庸子、35人目の現地派遣ボランティアとして渡タイ。
- 11・26 第14回理事会開く(事務局)
- 12・11 理事懇談会(事務局)
- 12・17-27 ヒラリー・サーモン、岡見浩子氏(国際難民奉仕団)保育センター織物プロジェクト視察。
- 12・20 福田菊氏(国連広報センター)日本の救援団体活動視察のためカオイダン・保育センター訪問。
- 12・23-27 笹尾勝(CYR監事)タイ現地活動状況視察。
- 12・24 吉岡淳氏(日本ユネスコ協会連盟)保育

センター来訪。

- 1984・1・9 改築中のカオイダン・保育センター(23)完成。新しい保育棟で保育始まる。設計は岸上宏子氏(ユネスコ・アジア太平洋地域事務所、バンコク)によるもので、熱帯の気候条件を考慮し、竹を主材にした開放的なデザイン。
- 1・22 理事懇談会開く。(事務局)
- 2・1-5 いいぎりゆき渡タイ。現地活動にあたる

事務局から

- 今年度の新しい国内事業として始めた、国際救援センター保育室での保育に関する報告書がまとまりました。ご希望の方に実費でおわけします。
- インドのスラムや季節労働者の子どもたちのために、16年前移動託児所(Mobile Crèche)を始め、国内で700もの施設に発展させたスワミナタン夫人が、思いがけずカオイダンを訪れました。すぐれた教育家、ことに幼児教育の専門家として、その不屈な精神を知らされる夫人のレポートが「貧しい地域に生きる教育モデル」です。
- 難民の自立をうたう仕事を始めて以来、本当の自立は自らの中にこそ求めるべきだと痛感しています。ことは「甘え」の体質改善をめざして前進です。